

Title	リサン師の印象
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.4 (1930. 12) ,p.126(658)- 126(658)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リサン師の印象

オルドスで黄土層の下から舊石器時代の遺物を發見して極東最初の舊石器發見の功績を荷ふたエミル・リサン師が來朝した。東亞考古會のため京都で支那の舊石器に就て、人類學會のため東京で支那の新石器に就て何れも北疆博物館に所藏せられる遺物を資料として有益なる幻燈講演を爲した。講演原稿は、何れ翻譯出版せられることと思ふが此處に同師の印象を少しく記してみやう

すらしとした長身で頑丈な體軀、少しも疲勞を覺えられぬ健康さは羨しい。東京に於ける講演は、一時半から六時までやつてそれで綽々として餘裕があつた。曰く「始まりが遅く、中途で一度休んだから正味三時間もかゝつてをらぬ」云。人格がごく朗かで誰にでも同情を起さしめる、そして氣さくで、察つしがいい好々爺である。學問に對する興味の廣いには驚く。最初比較言語學に志したそうであるが今は地質、動植物、人類、土俗の方面が専門である。身は清貧に甘んじてをるが、蒐集慾知識慾は實に熾烈である。今度來た時には一年も日本に滞在し、標本を集めてゆきたいといふ意向を洩した。氏の下には訓練された研究生が多數居り、一つの山岳を調査する時には十人位が手分けして、標本をさり盡すのだそうである。師は坊さんでありながら口をついで出づる言葉は極めて實利的な忠言である。箱根の山で、山くづれのあさをコダックに收めつゝ、「みよ、山を愛護する日本人でも山崩れにあつてはもうその跡に殖林も出來ない。この寫眞は支那人に教訓さすのだ」云つてゐた。樹木なき支那を森林化することが師の理想であるやうである。師の様な友人を持つた支那は幸福なるかなと思ふ。箱根では辻村太郎氏に教はつた様に大地獄から仙石上湯へさ下りたがその邊の原生林がすっかり同氏を悦ばしてしまつた。上湯の冠峯樓で湯に入り、日本食を香物までうまがつて味ひ、蘆の湖を横切つて元箱根に出た。濫澤さんのアテヒク・ミュージアムで目をつけた山鉈を此處でついに買得し、非常に嬉しがつた。師は長い間支那農民の器具家屋に關する多くの蒐集をなしてをり、日本の山鉈を全然特殊の物として興味を持たれたのである。箱根神社の杉の森は、勿論師を驚喜せしめた。箱根一日の旅で、師は地質、植物上隨分種々な蒐集をした。これで舊石器と新石器が見つけられれば文句がないのだがな。云々談いつた師は、翌日大山公爵の御案内で姥山貝塚を發掘し、しこたま新石器の資料を持つて歸られたそうである。知らず日本に於ける舊石器發見の功績は果して日本人によつてなされるや否や（松本信廣）。